



ていく中で、時々、次のような質問が寄せられます。

「敷地が狭いと作れないのでは？」

「費用がかかるのでは？」

「管理が大変なのでは？」

面積が狭くとも園庭ビオトープを作ることはできます。過去に訪問した一番小さな園庭ビオトープは、園庭の片隅に設けた1m四方にも満たない草地でした。それでも、オンパバッタが見られ、カタバミの黄色い花が咲いて小さな蝶のヤマトシジミが飛び交い、ひっきりなしに園児が集まっています。

費用と管理の手間は、作るビオトープの種類と大きさ、施工にかける時間によって異なります。草地や樹林を小面積でゆっくり時間をかけて広げていけば、費用も抑えられ、管理の手間も少なくすることができます。例えば、地域からカタバミやエノコログサ（ねこじゃらし）といった草の種やどんぐり、自然の幼木を探し、もらい受け、園庭に少しずつ生やしてビオトープを充実させていけばいいのです。

一方、人工的に池や小川を作ろうとする場合は、防水加工や給水施設の設置などで費用が発生します。その後の管理も、日々水を補給したり、増えすぎた水草や藻を取ったりと手間がかかります。ただ、その代わりに、トンボなど多様な生きものが行き交うようになり、園児が生きものを見つけやすく、水面のきらめきなど、水辺の多彩な表情は魅力があります。

園庭ビオトープの魅力は多様性と応答性

園庭ビオトープの魅力について考えるために、もう一つ、時々、寄せられる質問をご紹介します。「飼育活動とビオトープ、どちらも生きものとの触れ合い。違いはあるの？」

確かに、飼育活動も、ビオトープ同様に生きもの

との触れ合いです。でも、それぞれ利点異なるように思います。

飼育活動は、特定の生きものと向き合うのに適しています。園児は、生きものの色や形、食べものの好みや食べ方、休み方など、観察を通じて様々なことに気づくことができます。また、世話にかかわることで生きものへの愛情が育まれたり、責任感が生まれたりすることにもつながったりします。

一方、園庭ビオトープの魅力は、その「多様性」にあります。園児の興味関心は様々です。発達段階によっても異なります。また、時間の経過とともに変化します。草花を集める、虫を探すなどの動の遊び、自然のものでままごとをしたり、工作したりするなどの静の遊びなど、園児の興味に応じて園庭ビオトープは園児に様々な素材を提供します。

さらに、「応答性」があるのも特徴です。園児がワクワクする出来事を見せたり、思い通りにならなかったりすることで考えるきっかけを与えたり、工夫を促したりします。

そうしたことから、園庭ビオトープは保育指針の解説に記載されている「子ども自身の興味関心が触発され、好奇心をもって自ら関わりたくなるような、子どもにとって魅力ある環境」の一つといえます。



(2) 案内

保育で自然の力がより一層活用されることを願い、国際シンポジウム「子どもたちに、自然の力を」が開催されます。詳細は日本生態系協会のHPをご覧ください。

日時 12月1日(土) 13時

会場 東京・文京シビックホール

*本連盟も後援しています。

国際シンポジウム

子どもたちに自然の力を

2018年12月1日(土)

13:00 - 16:10 文京シビックホール 小ホール

日本生態系協会 日本ビオトープ管理士会



自然が持つ 保育力を 生かす

1

ビオトープについての誤解

田邊龍太

Ryota TANABE

(公財) 日本生態系協会教育研究センター長

園庭ビオトープ=池作り？

私たちの協会は、全国各地のまちづくりの中で自然が保全・再生され、その自然が地域の活性化に生かされるように提案や調整を行っています。最近では、各地でツルやコウノトリなどの大型水鳥類の生息地を広げて観光などで地域を元気にする橋渡しをしたりしています。

こうしたまちづくりを促していくためには、多くの人が「身近に自然があるとイイね」「自然の恵みって大事だよね」と思うことが、あわせて求められます。そのために、私たちの協会では環境教育にも力を注いできました。自然の美しさや楽しさ、不思議さは、体験して初めて実感できます。その実感をきっかけとして自然への興味関心は広がります。

こうした体験を促すためには、プログラムや教材の提供にとどまらず、自然と触れ合う場を子どもた



ちの身近に整える必要があります。そこで、私たちの協会では、ドイツで生まれた学校・園庭ビオトープを1989（平成元）年から普及し始めました。

ビオトープ（biotop）という用語は、日本では池を作ることとされている方を多く見受けられます。そもそも、ビオトープは、「地域の様々な野生の生きものが生息できる空間」というもっと広い意味があります。ドイツでは、樹林や草地、小川や湿地、海浜など、自然をビオトープと称して細かく種類分けし、自然と共存したまちづくりの一環として保全したり、減ってしまったものは再生したりしてきました。このビオトープの考え方が、自然体験や環境教育の場として学校や園に取り入れられ、「学校・園庭ビオトープ」として広まりました。

日本では、学校や園で自然の池を作る取り組みがビオトープとして広く紹介され、ビオトープは自然の池作りと定着したようです。

つまり、園庭ビオトープは池だけではなく、草地や樹林など地域に見られる自然の種類があつてよいのです。また、園庭ビオトープは園庭の中だけとは限りません。私たちの協会では、園の周辺に元々ある自然であっても、園児が普段足を運び、遊びに活用されているのであれば、そこも園庭ビオトープと位置づけています。

園庭ビオトープは難しい？

私たちの協会が、日本で園庭ビオトープを普及し